

Voice 6

ほいす

2001. 3 .15

北区飛鳥山博物館だより



飛鳥山博物館 桜祭り



Cherry Blossoms in Atakayama Tokyo



飛鳥山博物館の桜祭り



飛鳥山



飛鳥山博物館 桜祭り

歴史的遺産の保護と野外博物館

小林三郎（当館名誉館長）

1960年代から急速に進んだ日本列島の改造計画による開発事業が、列島内の原始・古代をはじめとする各種遺跡の発見をもたらした。人々の歴史への関心を高めたことも事実だが、結果としてきわめて多くの歴史的遺産を失ったことも事実である。永々として積み重ねられた人間の歴史的遺産は、遺跡も遺物も同じように現代に生きる私達に対して、さまざまな未来への希望と、歴史的ないましめを示唆している。多くの人々は、こうした歴史的遺産の重要さに気付いて、遺跡、遺物の保護・保存を訴えてきた。文献などに記された部分的な情報と違って、遺跡や遺物のもつ情報は、それぞれの地域や時代の総合的な情報を提供してくれるから、歴史学だけでなく諸分野の学問研究にとって重要な材料である。

開発による遺跡の消滅を全面的に阻止することは不可能だが、できる限り遺跡を原状のまま保存・保護する方向で開発事業を再検討すべきであることを、全国各地の遺跡保護団体が訴え続けてきた。その結果、いくつもの遺跡が全面的に保存・整備され史跡公園として活用の途が計られるようになってきた。それぞれの公共団体の努力が、少しずつ具体的な成果を挙げつつあることを評価すべきであろう。さらなる前進をのぞみたい。

自然と人々のかかわりを、博物館という限定された建物の中で展示するのではなく、相応しい自然環境の中で展示活動を実践する野外博物館という概念は、遺跡保存の目的からみれば、幅の広い、奥の深い活動の場として大いに有効であることは言うまでもない。したがって、野外博物館は面積を限定しないのが原則であろう。古都保存法や世界遺産指定の原理は、自然と人々とのかかわりを重視した方向とみるべきで、現代の人々をも含めた自然と人間をテーマとしている。その中で原始から現代までの人々の「生きざま」の歴史を、肌で触れながら学習することが重要な課題である。



中里貝塚の発掘



豊島馬場遺跡の現地説明会



平塚城址に建つ平塚神社

北区飛鳥山博物館は、飛鳥山に設置された博物館だが、周辺の歴史的遺産にかこまれていて、十分に野外博物館の中心的存在と理解すべきである。原始・古代はもとより中世、近世、近代から現代にかけて、自然環境はもとより、人々の生活の有様がさまざまな分野で観察でき学習できる。2000年9月に国指定史跡となった中里貝塚は、調査が不十分とはいえ、縄文人の高度な生活技術を垣間見せてくれた。弥生人の大規模な環濠集落のあった飛鳥山周辺、古代武蔵国の豊島郡役所の存在と、隅田川を挟んで隣接する下総台地の景観と人々の交通路、中世豊島氏の活動や太田道灌ゆかりの稲付城など、原始・古代・中世の時代的パノラマをみるようで、それら自身が野外博物館の展示となっている。

考古学的な遺跡の発掘調査によって発見された遺跡だけが保存・保護の対象となっているのではない。自然と人々とのかかわり、人々の様々な技術、様々な技術を駆使してつくられた様々なものを、直接、間接に知り学習すること、そしてそれを継続することの意義を見いだせるもの総てを、保存し保護する対象としなければならないと思う。

参加者のVOICE

今年3月27日で北区飛鳥山博物館は開館3年を迎えます。これにあたり自然史講座とビジュアル講座第5回の参加者の方に聞いてみました。博物館の事業で最も印象に残ったものでは「古墳巡り」「12ヶ月巡り」等々例年開催の講座が多くあがりました。今後博物館に期待することには『講座の回数と人数を増やして欲しい』『研究発表の場として活用して欲しい』や『北区の近代』『豊島氏』に関する企画展示や『企画展の解説』といった企画展への要望などがありました。当館の魅力については『身近にある博物館なので気軽に来れて親しみやすい』という意見が多く、開館から今の変化については『親しみやすくなった』『博物館の存在が浸透してきた』『区外の人でも大分来るようになった』とありました。

「ほいす」の印象についても『紙面が明るい読みやすい』『結構面白く編集ができています』など嬉しい意見が多くほっとしました。

Q：今後の北区飛鳥山博物館に期待することは？

郷土の歴史をビジュアルに体感できる展示・解説会等の企画を。(滝野川60代男性) ヨーロッパやアメリカのようにハンズ・オン方式のワークショップを。(滝野川50代男性) お役所から脱皮していただきたい。やはりそれが一般の人を受け入れる一番の目玉じゃないですか。子供から老人まで誰でも親しめるようなことをやっていただきたい。あともうちょっと宣伝された方がいいんじゃないかと。(王子70代男性) 北区だけじゃなくて近隣の区にも少し足をのぼして色々やられたらどうかな。(岸町60代男性) インターネット等で北区の歴史を新説も含めて発信していただきたい。ホームページだけでなく電子メールも活用すべきでしょう。(志茂40代男性) 子どもが体験して話を聞けるようなものを。次世代の人材の発掘をこれからお願いしたい。(王子40代女性)

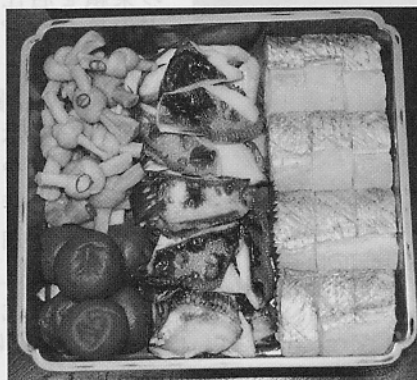
常設展示

江戸の世のお花見弁当

常設展示室、桜の木の下に展示されている花見弁当。このお弁当は200年前の享和年間に書かれた『料理早指南』『花見の弁当』の献立をもとに作りました。しかし江戸時代の料理書は「何が何グラム」などの詳細なレシピがあるわけではなく、簡単な料理の名称が書いてあるだけなので、実際に料理を再現するときは多くの調査研究が必要でした。このレプリカを製作するにあたっては神戸山手女子大学奥村彪生教授の指導、監修によりましたが、実際、製作段階では色々な発見がありました。今回は「花見弁当」のメニューのうち、上の部2段目「引肴」を中心に江戸の「美味しい生活」を垣間見てみましょう。

写真の左下から見ていくと、何の変哲もない「梅干し」があります。これこそ「甘露梅」、梅の果肉部に当時高価な白砂糖を仕込んだスグレモノです。その上が「千大根」。これは千切りにした大根を五分漬けにして、結んで細く切った赤唐辛子をあしらいました。そしてお重の真ん中にドンと鎮座するのが、「蒸鱧」。これはカレイを薄く切って焙炉にかけ調理したものです。焙炉とは框に紙を貼ったもので火にかけてお茶などを焙る道具ですが、情緒もあり香り良いものです。お重の右にひかえるのが桜鯛の「はや鮓」。いわゆる「にぎり鮓」とは違い押し鮓になっています。にぎり鮓の出現はこのレシピが書かれた約30年後で、

江戸中期までは鮓と言ったら押し鮓が普通でした。確かに江戸時代、生鮓を行楽に持参するのはちょっと危険です。実際、安政年間(1854~60)成立の『江戸じまん』でも江戸詰め藩士が飛鳥山に持参したお弁当に「折り入れの鮓を携え」終日の楽しみとしていました。さてこの押し鮓、山葵のかわりに和辛子を薬味にしましたが、現在は小笠原諸島の「島鮓」にその名残が伝えられていますが大変に珍しい食感が楽しめます。(石倉孝祐)



花見弁当の中味は？

学芸員のエッセイ

ひねもす

早いもので、もう桜の季節。春の訪れが嬉しい…と書きたいところですが、花見の名所・飛鳥山公園にある当館にとって、春は一番のかき入れ時でもあり、職員はお客さまの対応や細かいトラブルの処理などに振り回されることになります。

春に限らず、いつものんびりしていると思われがちな博物館でも一年の間には節目がいくつもあります。楽屋話となりますが、大まかに我が博物館の春夏秋冬をご紹介します。

さて春はサービス面が忙しいだけでなく、初夏に監査を控えて事務職員が青くなっている時期でもあります。勿論やましいこと(?)は何も無いのですが、その準

春夏秋冬、そして春

備だけで事務量が数倍に膨れ上がります。そして花見の喧騒が過ぎ去る頃になると、学芸員は夏の講座などに向けて本格的に準備を始めます。

夏になると、子供や親子向けの講座などをこなす傍ら、早くも来年度の予算準備が待っています。区の予算要求は秋ですが、予算を取りまとめる期間を考えると、担当者レベルでは夏の間予算をまとめなくてはなりません。今年度の事業を始めたばかりで来年度の計画をまとめるのは「鬼が笑う」ような気もするのですが、先立つものはやはり必要。具体的な予算を出すために企画内容を練り上げ、見積書を見ては溜め息をつく日々が続きます。

夏が過ぎ一息つくと、秋の講座シーズンです。特別展も秋に開催することが多く、11月頃からは小学校の見学も多くなり賑やかになります。

やがて寒風とともに来年度の予算が内示されると、それをもとに実際的な来年度の事業スケジュールを組み上げます。調整に四苦八苦する間に年度末が迫り、春に事業、とりわけ企画展を抱えている学芸員は事務処理の期限を睨み、冷や汗をかきながら仕事をするようになります。

そしてまた春…。こうして書き出してみると、今更ながら1年の早いこと！桜の花が毎年繰り返し咲きながら大木に育っていくように、博物館も年毎に充実していけると良いのですが。そのためにも新しい年度はできるだけ枝葉を広げていきたいと思っています。

(久保埜企美子)



特別展「岳人冠松次郎～その生涯とアルピニズム」が開催されました



昭和38年北区岸町の自宅にて
杉本誠氏撮影

北区飛鳥山博物館では社団法人日本山岳会より後援を受け、10月1日から11月30日まで特別展「岳人冠松次郎～その生涯とアルピニズム」を開催いたしました。同展は本郷で生まれ瀧野川町中里で壮年期を送り北区岸町を終焉の地として昭和45年7月に生涯を終えた冠松次郎氏の没後30年を記念してその人生と業績をふりかえったものです。

日本人名事典によれば、冠氏は「黒部の主」の異名をとり日本登山史を彩った著名な登山家です。大正末期に険しい黒部峡谷を初めて完歩し、その自然美を紹介した人物として知られていますが、人生の実像についてはこれまで十分に伝えられてはいませんでした。

本展では生まれてから亡くなるまでの足跡と登山の業績を居住地ごとに紹介し、ご遺族や社団法人日本山岳会などから提供を受けた未発表の写真や肉筆原稿・葉書・遺品をはじめとして、山道具・著作類など冠氏の活躍ぶりを明らかにしうる有形無形の様々な資料を展示しました。地元の中里や岸町などでの暮らしぶりや戦前の国立公園協会で仕事・文部省映画製作・詩人室生犀星との関係など必ずしもこれまであまり知られてこなかった登山以外の事績についても取り上げることができ、冠ファンのみならず、これまで冠氏についてご存じなかった方でも関心をもっていただけたのではないかと思います。



熱心に見つめる観覧者

▶ 展示の目玉一映像作家としての一面に接近 ◀

展示では日本の記録映画史に名を残すカメラマン白石茂とで撮影した山岳映画初期の名作「黒部峡谷探検」（昭和2年）ほか「赤石嶽」（昭和4年）「鹿島槍ヶ岳と下廊下」（昭和5年）「尾瀬」（昭和6年）の計4本を部分的にはありますが初めてDVDで再生を試み、生前の冠氏の登山を見ていただくことができました。あわせて当時使用した映画撮影機も展示しました（作品と撮影機は東京国立近代美術館フィルムセンター所蔵）。



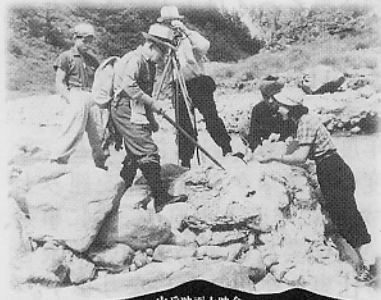
NHKスタジオにて深田久弥氏と
(社)日本山岳会蔵

展示会場の一隅には亡くなる5年前にNHK TV「この人この道」で日本百名山の著者でおなじみの作家・故深田久弥氏と対談した際の肉声が聴けるコーナーも特設しました。

◻ 晩秋・懐かしき人に再会～冠さんを語る～

会期中の11月3日（文化の日）には富山県「立山博物館」とツカモト・プロとの共催で冠氏ゆかりのJR駒込駅にほど近い北区滝野川会館大ホールで「映画で冠さんを偲ぶ会」が開催され、文部省作品「黒部峡谷探検」全編と晩年に主演した作品「黒部の源流」の2本が上映されました。当日は、生前の冠氏を知る映像作家・塚本福治郎先生の「生解説」で多くの区民や登山愛好家の方々が往年の冠氏の登山姿を目に焼き付けました。また、会場には冠氏のお孫さんにあたる村岡和子氏ご夫妻もお越しになり熱心にご覧いただきました。

当日は関係者によるトークも
行われました



山岳映画上映会
「映画で冠さんを偲ぶ会」

プログラム

1. 開会の辞
2. 文部省制作「黒部峡谷探検」上映（生解説：塚本福治郎）
3. 対談「昭和初期の映画をめぐって」（小・林 聖）
4. 三成松次郎作品「黒部の源流」上映（生解説：塚本福治郎）
5. 閉会の辞

会場：北区滝野川会館大ホール 日時：平成12年11月3日午後2時

●主催 北区飛鳥山博物館 ●共催 立山博物館（立山博物館）ツカモト・プロ
●後援 北見地区山岳会 ●協力 山岳映画クラブ

観覧者のアンケートから

深田久弥氏との対談の録音流れるなど映像（山岳映画のダイジェスト）と相まって大変充実しており満足しました。小さい時父から黒部の山に詳しい登山家が家の近くにいと聞かされていたので特に興味を持っていました。

（以前北区中里に居住、神奈川県 60代 男性）

先月黒部下廊下に行ってきた。ガイドブックで冠氏の名を知り、この特別展のポスターを目にし見に来た。今とは比べものにならない険しさ。それだけに手つかずの自然があったのだろうと思う。

（北区東十条 40代 男性）

赤羽台に山を見に来た記事を何かの本で読んだ記憶があり、どのような方かと思ひ見にきました。小生も後立山連峰・立山・黒部ダムに行ったことがあり、大変興味深く見ました。荒川区に冠通りという名の道がありますが、何か関係ありますか。

（北区赤羽西 60代 男性）

収藏品のご紹介 もう一つの剥ぎ取り標本 —西ヶ原貝塚貝層剥ぎ取り標本—

北区飛鳥山博物館のホワイエには、中里貝塚の貝層剥ぎ取り標本が展示してあります。実は、本館には別の貝塚の剥ぎ取り標本が収蔵庫にあります。それが、今回ご紹介する西ヶ原貝塚貝層剥ぎ取り標本です。剥ぎ取り標本とは土層などをそのまま薄く剥ぎ取ったものです。その方法は、貝層断面に薬品を塗りつけ、ガーゼのような布を貼り付けます。そして、さらに薬品を塗って布を貼り付けるという行程を数回繰り返した後、薬品が固まるのを待って布を引っ張ります。すると、布に付着した貝層がそのまま剥ぎ取られるのです。例えば、女性が顔パックで毛穴の汚れを取るのと同じ原理です。



剥ぎ取り作業の様子



貝層剥ぎ取り標本

今回ご紹介の西ヶ原貝塚貝層剥ぎ取り標本は、幅1.8m、高さ75cmの大きさで、中里貝塚のものとは非常にコンパクトです。というのも、西ヶ原貝塚の貝層の厚さは50cm程で、地表面を含めても75cmしかないからです。貝層を観察するとヤマトシジミを主体とし、ハマグリ、カキ、ハイガイなどが混ざります。中里貝塚がカキやハマグリでほとんど占められているのと大きく異なります。それは、西ヶ原貝塚は縄文時代後期を中心に形成されたもので、縄文時代中期の中里貝塚とは時期にちょっとずれがあり、貝の生息環境が異なっていたからです。また、貝層の中には土器や骨角器の破片も顔を出しています。

遺跡は発掘調査が終わると埋められ、建物が建てられ、もう見る事ができない所がほとんどです。しかし、貝塚などはこの剥ぎ取りの方法を使えば、その一部ですが発掘後でも見る事ができます。博物館には土器や石器の他にもこんな資料もあるのです。
(鈴木直人)

あみり

平塚らいてう 田端の家



現在の上の坂付近。らいてう・芥川邸跡への指標は何も残されていない。

一元始、女性は真に太陽であった。真正の人であった。今、女性は月である。他に依って生き、他の光によって輝く、病人のやうな蒼白い顔の月である。……

これは「青鞥」創刊号の創刊の辞として有名な一節です。この著者平塚らいてう（本名明）が北区田端の地に住んでいました。明は最初に北区に住んだ上中里の滝野川区役所裏付近から、翌年の大正7年、田端445番地・現在の田端1-19にアトリエ付2階建ての家を買い移ってきました。この時、明は32歳、28歳の時画家の奥村博と入籍せずと同棲を始め、既に二子をもうけていました。それ以前は「青鞥」編集兼発行人を明治44年の創刊から大正4年まで務め、「門窓より」などの評論を発表します。初の女流文芸雑誌として出発した「青鞥」でしたが、女性としての自己とは何か、どう生きるべきかを大胆に主張し様々な社会の議論を呼び婦人運動高潮の発端となり、「新しい女」の名称も生まれました。



田端の書斎でくつろぐらいてう
資料提供：田端文士村記念館

田端の頃は「青鞥」の運動が終焉し自身の家庭に目を向け始めた時期でした。再び運動への意欲が高まり、大正9年自宅2階を事務所として「新婦人協会」を結成、機関誌「女性同盟」を発行し女性が政治に参加する権利を求めて活動しました。大正10年まで3年間の田端居住は、明の人生の第二ステージとなった場所です。田端時代は家庭生活では苦労が多かったようですが、田端にいた芸術家たちとの交流もあり、「上の坂」を隔てた向側には芥川龍之介の家があり、室生犀星ら文士達も田端の家によく訪れました。今年「青鞥」は創刊90周年となりますが、らいてうが問い続けたものは現代社会においても色褪せないと思います。（岩崎みどり）

Q&A

Q) 冬に民具の展示が多いのはなぜですか？

A: 実は小学3年生の社会科の授業で「昔の道具さがし」という単元がありますが、一般家庭に昔の道具が残っていることはまれです。そのため色々な博物館で学校見学を念頭に置き、昔の生活や道具に関する展示を催すことが多いのです。当館でも1月下旬から2月いっぱい、学校見学用に昔の道具の展示と、それに併せて火熨斗や炭火アイロンなど、実際の資料を用いた体験学習を行いました。
(平野祐子)



お知らせ

「ぼいす」への皆さんの声をお待ちしています。紙面に関する感想・要望あるいは北区に関する情報などを、お手紙かメールで博物館までお寄せ下さい。
〒114-0002 北区王子1-1-3 北区飛鳥山博物館 ぼいす係 Eメールアドレス askamuse@kitanet.ne.jp

閲覧コーナーから 新しいビデオが入りました!

閲覧コーナーのビデオに、また新しい仲間が加わりました。今回はその中から「日本100年—現代日本の歩み」をご紹介します。

今年は21世紀という新しい世紀の幕開けとなる年。これからの100年間、一体どんなことが起こり、どんな風に社会が変わっていくのでしょうか?そんなことを考える上でも、ここ100年あまりの日本の変遷を、あらためて振り返ってみてはいかがですか?

この「日本100年」は明治・大正・昭和・平成と、四時代にわたる貴重な映像のメッセージです。NHKと朝日新聞社の豊富なニュースフィルムと資料を基に「政治編」「社会編」「経済編」と、分野別に構成されています。あんな出来事やこんな事件が映像と共に次々とよみがえってくるはず。全38巻、各巻約40分。解説書2冊付。

また図書も事典類、児童書、シリーズ物、ビジュアル本など沢山入り、新刊書も多く購入しました。更に充実した閲覧コーナー(無料!)をぜひご利用下さい。(平野祐子)



皆様のご利用をお待ちしています!

ミュージアム・カレンダー 2001年4月~9月

	4月	5月	6月
特別展示室		企画展「環濠をもつムラ・飛鳥山遺跡」展 4/21(土)~6/24(日)	
講座など	「風俗画報」に見る100年前の明治東京 4/14(土)~12/8(土)(全9回) 「絵本江戸土産」に見る江戸の生活 4/14(土)~8/4(土)(全5回) ミュージアム・トーク(全4回)	特別講演会 5/27(日) 「(仮題)東日本の環濠集落」	民具学講座(全5回) 6/8(金)~6/29(金) ミュージアム・トーク(専門別) 6/23(土)
	7月	8月	9月
特別展示室		イベント「思い出空間・夏を集めよう」 7/20(祝)~8/31(金)	スポット展示 9/8(土)~9/24(日)
講座など		映画上映会 8/11(土) 王子土産を作る 8/18(土)、8/25(土) 夏休みわくわくミュージアム(7/20~8/31) 博物館探検隊(全4回) 縄文クッキー作りに挑戦(全4回) クイズラリー 8/5(日) 夏休み土器づくり教室(全6回)etc.	ミュージアム・トーク(専門別) 9/23(土) 『江戸名所図会』の世界 9/1(土)~12/8(土)(全4回)

利用のご案内

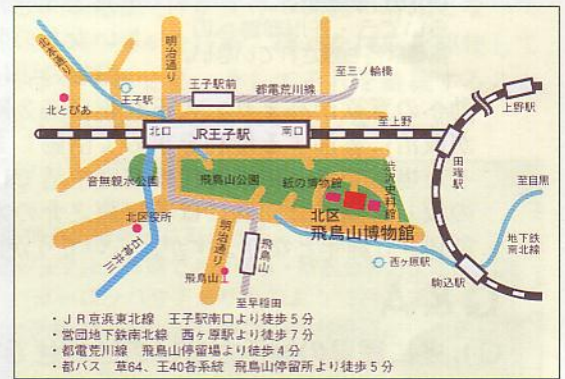
【開館時間】
午前10時00分~午後5時
(有料の展示室への入場は午後4時30分まで)

【休館日】
毎週月曜日(国民の祝日・振替休日の場合は開館)
年末年始(12月28日~1月4日)
国民の祝日および振替休日の翌日(土曜・日曜日)
の場合は開館)このほかに臨時休館日等があります。

【常設展観覧料】

	個人	団体
一般	300円	240円
小・中・高	100円	80円

- ・小学生未満は無料
- ・団体扱いは20名以上
- ・三館共通券は当館のほか、渋沢史料館、紙の博物館の3館をごらんになれます。(一般720円小中高320円)



編集後記

来る3月27日に、北区飛鳥山博物館は開館3周年を迎えます。当初より「大地・水・人」をテーマに、武蔵野台地に住む人々の足跡を自然のかかわりの中で展示した常設展示をはじめ、地域博物館として地域に密着した数々の企画展・特別展を行ってきました。試行錯誤の連続だった教育普及事業もようやく定着し、現在は本当に多くの方々に参加していただけるようになり

ました。博物館の活動や情報をお伝える目的で立ち上げた「ほいす」も発行以来第6号を数えました。今回は久々に表紙カラー、内容面も濃いものになったと思います。21世紀を迎え博物館の目指す未来像もさらに広がってゆきます。新しい時代を見据えながらも利用者の方々や常につながっており、伝え続けるほいすでありたいと思っています。(岩崎もどり)

北区飛鳥山博物館だより
ほいす Vol.6

発行 平成13年3月15日
編集 北区飛鳥山博物館
〒114-0002 東京都北区王子1-1-3
TEL.03-3916-1133

発行 東京都北区教育委員会
〒114-0022 東京都北区王子本町1-2-1
TEL.03-3908-1111(代)

印刷 (株)内国社印刷所